

令和4年度東京都立北特別支援学校 学校経営報告

1 今年度の取組と評価

【肢】 肢体不自由教育部門 【病】 病弱教育部門 ※A：達成 B：おおむね達成 C：達成できなかった

(1) 学習指導の充実

| 取組内容 | 評価 |
|--|----|
| ○部門ごとに（肢体不自由は教育課程別）計画的な研究を行う。 ・教育課程別に授業研究を中心に研究を進めた。概ね計画通りに進行しているが、【肢】の知的・準ずる課程がテーマとする「タブレット端末を有効活用した授業研究」は、十分に深めることができなかった。 | B |
| ○授業アドバイザー等による授業（研究授業、日常的な授業）支援による授業力向上を図る。 ・授業アドバイザーによる研究授業の実施、指導案指導等を行った。今年度は肢体部門だけでなく、病弱部門でも指導助言を受け、両部門での指導力向上を図った。 | A |
| ○指導教諭模範授業見学により教員個々が授業改善を行う。 ●年次研対象者・主幹教諭を除く5割以上の教員（昨年度未実施者中心） ・【肢】昨年度未実施だった者26名中25名、【病】全教員27名中25名が見学した。優れた授業を見学することで、教員個々の授業改善に役立てることができた。 ●年次研対象者は授業アドバイザー模範授業見学 ・【肢】全ての対象者が模範授業を見学した。学習指導要領を踏まえた指導等の理解が深まった。 | A |
| ○準ずる教育課程におけるデジタルを活用した他校との共同学習を推進する。（指導部指定事業）【肢】 ・都立鹿本学園の児童との共同学習を12月までに6回実施し、交流を深めることができた。次年度は実際に対面し合同の校外学習を計画している。 | A |
| ○病弱教育部門用学習指導案のモデルを作成し、授業研究の充実を図る。【病】 ・授業アドバイザーの助言をもとに病弱部門としての視点を明確にした指導案モデルを作成。研究授業での活用が進み、指導力向上を図ることができた。 | A |
| ○デジタルサポーター、外部専門家の活用や研修により、一人一台配備のタブレット端末や、統合型学習支援アプリなどの活用を一層促進する。 ・習得状況に応じた研修会を3回実施し、苦手な教職員のスキル向上を図った。授業でのICT機器の利活用は進んでいるが、一人一台配備のタブレットの活用に課題がある。使いやすいアプリの共有化を図ったり、全校で共通して使用するアプリの選定等を行ったりしていく。 | B |
| ○オンラインによる児童・生徒同士や外部とつないだ学習活動を取り入れ、ベッドサイド等での学習の内容を充実させる。【病】 ・オンラインによる遠足（美ら海水族館）や病院間をつないだボッチャ大会などを実施し、学習の幅を広げると同時に児童・生徒間の交流を図ることができた。 | A |
| ○教員と学校介護職員・病弱支援員の会議参加により、児童・生徒の情報共有を図り学習効果を高める。 ・指導に関わる会議には、介護職員・支援員も参加し、児童・生徒の様子や指導の目標等を共有した。 | A |
| ○全国肢体不自由教育研究会、全国病弱虚弱教育研究連盟研究協議会を全教員で聴講し、専門性の向上を図る。 ・両部門とも全教員がオンラインでの研究会を聴講した。全肢研で本校の研究について報告をした。 | A |

(2) 自立活動の充実

| 取組内容 | 評価 |
|--|----|
| ○外部専門家等を活用した教員の指導力向上を図る。【肢】 ●担当が日常的な指導の充実を図るため、自立活動部教員等の助言を受け、アドバイスシート、事前記録の内容を充実させる。同教員は、特設の時間において、外部専門家と共に担任に対して指導・助言を行う。 | B |

| | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・アドバイスシートに確認欄を設けたことで、担任が見る機会が増えた。外部専門家だけでなく自立活動教員の指導助言もシートに反映していくように改善していく。 | |
| <p>○新転任者向けのベーシック講座を部門ごと開講し、3年間程度のプログラムを作成して計画的に実施する。</p> <p>【肢】自立活動ベーシックプログラムとして3回実施した。担任による自立活動の指導を進めるため、講座の充実を図る。【病】年間計画を定め、病気の理解、指導の充実、連携等について研修を6回行った。</p> | A |
| <p>○指導部で作成した「ふりカエルシート」を活用し、自立活動の指導の充実を図る。【病】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校用に項目を整理した「楽しく学習するためのアンケート」を作成し、全ての児童・生徒に実施した。病弱児の「コミュニケーション」「心理的な安定」について把握するものとして活用を進めている。 | A |
| <p>○精神疾患のある児童・生徒への指導や対応について、病院等と連携して教職員の専門性を高める。【病】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・訪問病院の医師より講演を受けた。病院と定期的にカンファレンスを行い、個々のケースの対応について理解を深めた。 | A |

(3) 児童・生徒の人権が尊重され、安全で安心して過ごせる学校づくり

| 取組内容 | 評価 |
|---|----|
| <p>○「人権教育プログラム」の内容を踏まえた研修を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会委員でもある専門家の方を招聘し研修を行い、教職員の人権意識を高めた。 | A |
| <p>○児童・生徒を「名字+さん」で呼名し、年齢に応じた対応をする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「名前+さん」で呼ぶ場面が未だ見られる。各自が人権意識をさらに高めるとともに、児童・生徒への不適切な接し方を見過ぎさないよう、学部主任、管理職からの働きかけを継続する。 | B |
| <p>○自己申告面談や体罰聞き取り調査を活用した体罰や不適切な指導のない教員集団をつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サービス事故防止研修の中で体罰等に関する研修を3回実施した。教職員から年3回の聞き取りを行うと同時に体罰調査アンケートを行った。不適切な指導を含め体罰と認める案件は0件である。 | A |
| <p>○日常的な注意喚起や研修（参加型を含む年3回以上）を行い、児童・生徒の負傷等事故0を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学期の始めに事故防止研修を実施し、校内で起きた過去の事故について振り返りを行った。今年度重大事故は0件だが、軽微な事故が8件あった（昨年度16件）。 | B |
| <p>○感染状況や都教育委員会通知等による校内の感染症対策を継続して実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・都のガイドラインに基づき、感染症対策を継続して行ってきた。校内のクラスターは確認されていない。 | A |
| <p>○モデル教室をスタンダードとした清潔で学習環境にふさわしい教室整備を継続させ、廊下や特別教室など校舎内全域の整理・整頓を行う。【肢】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境整備マニュアルに廊下や特別教室等の新規内容を追記し、改訂版を全校周知した。廊下や特別教室については不十分なため、整備日を設定する。学部主任や環境整備担当が定期的に状況確認する。 | B |
| <p>○経営企画室担当者と教員が連携し、工事に関わる教室移動計画を作成し、安全な引越し作業と教育活動を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・工事に関する情報を基に計画的に教室移動を行い、大きな支障なく教育活動を継続することができた。 | A |
| <p>○バス会社と連携し、毎月の運行連絡会や研修会での乗務員研修を行う。【肢】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・月1回、障害等についての研修や緊急時対応訓練等を行った。安全運行の意識とともに人権感覚の向上を図った。 | A |

(4) ガイドラインに基づいた安全な医療的ケアの実施【肢】

| 取組内容 | 評価 |
|---|----|
| <p>○看護師、教員、学校介護職員の研修やインシデント・アクシデント事例共有を行い、事故0を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研修を3回実施したが、医療的ケアに関する事故が3件あった（昨年度6件）。事故防止のため、使用する物品や扱う手順の統一を小学部1年生から計画的に進める。 | B |

| | |
|--|---|
| ○保護者付添い期間の短縮に向けた取組を行う。令和5年度入学する医療的ケア児の健康観察などを就学前から計画的に進める。 ・就学前に看護師等が通所施設等で健康観察を行い、保護者説明会も2月に計画している。4月からの学校生活で健康観察の後、指導医検診をもって速やかに看護師実施に移行する。 | A |
| ○日帰り校外学習時の教職員による医療的ケアの実施を進める。 ・教員による健康管理で問題のない全ての児童・生徒について、看護師が医療的ケアを安全に実施した。 | A |
| ○学校におけるIVH管理（医療的ケア対象外）を適切に行う。 ・課題があれば迅速に対処しIVH管理を適切に行うことで、安全に学校生活を過ごすことができた。 | A |

(5)進路指導、復学支援の充実

| 取組内容 | 評価 |
|--|----|
| ○キャリア教育全体計画に基づき、担任が学部・学年や個々に応じた進路指導を行う。【肢】・支援部や進路専任が担任を補佐、支援し、学校として系統的な指導を行う。 ・キャリア支援マップの作成や進路研修、就労アセスメント実習に担任が関わることで、進路指導の充実を図った。授業との関連や担任の役割を明確にし、さらに担任の指導力向上を目指す。 | B |
| ○卒業後の生活を意識した中高BGの作業学習の授業内容を充実させる。【肢】 ・中学部は石鹸、高等部はクリアファイルを通年で作成した。指導教諭の模範授業参観や企業での研修受講をとおして授業改善を図った。進路指導を関連付けて継続して改善していく。 | B |
| ○教職員や保護者へ、進路や卒業後の生活についての情報提供を行う。【肢】 ・支援部だよりや進路かわら版での情報提供が不十分だった。キャリア教育や進路指導について、小学部の教職員や保護者にも分かるように丁寧に解説していく必要がある。新たに校内かわら版を作成し、教職員への情報提供を始めたが、内容や回数などを計画的に行っていく必要がある。 | C |
| ○復学に向けた支援のため、継続的に前籍校や病院と情報交換を行い、「前籍校との連絡記録」及び「病院とのカンファレンス記録」に記載し、その活用を図る。また、復学支援に活用しやすいように生活支援シートの書式変更を行う。【病】 ・それぞれのシートに記載はされているものの、活用が十分ではない。今後導入される都立学校統合型校務支援システム(C4th)により、教職員が活用しやすいシステム整備を進める。 | B |
| ○「病弱中高進路事例集」を作成しつつ、内容を生かした進学指導を組織的に行う。【病】 ・上記の記録と同様、事例集の作成は進んでいるが十分な活用には至らなかった。事例の整理を行うと同時にオンライン学校見学など個性を生かした進路指導を進める。 | B |

(6)児童・生徒の興味・関心をひろげ、生活を豊かにする取組の実施

| 取組内容 | 評価 |
|--|----|
| ○外部図書館司書を活用し、図書室や図書コーナーの整備を行うとともに、読み聞かせなどの助言を受け、読書活動を充実させる。 ・司書による図書室整備や読み聞かせは充実した。読書活動の推進が不十分であり、新しい取組を検討する。こだま分教室では文京区オンライン図書館と連携し、電子図書を借りることが可能となった。 | B |
| ○東京2020オリンピック・パラリンピックのレガシーとして、児童・生徒がスポーツを通して交流する機会となる「全校ボッチャ大会」を行う。 ・2月に感染状況に応じた大会の開催を計画している。病弱部門もオンラインで参加する。 | A |
| ○スポーツクラブの活動により、大会参加やスポーツに親しむ機会を設ける。【肢】 ・感染症対策を徹底して練習を重ね、陸上・ボッチャ・ハンドサッカーの各種大会（予定）に出場した。 | A |
| ○展覧会やコンクール等への応募やオセロ大会への参加など、一人一人の長所や個性を学校外で発揮する場を積極的に設ける。 ・王子カルチャーロード、総合文化祭（美術、書道、写真）、北区連合展等に出品した。オセロ大会は両部門から1名ずつ参加し、練習の成果を発揮できた。個々の力を発揮できる場をさらに開拓する。 | B |

(7) 児童・生徒の生活支援と地域、関係機関との連携

| 取組内容 | 評価 |
|---|----|
| ○本人・保護者の希望を生かし、交流校の状況に応じた様々な方法での副籍交流、学校間交流に取り組み、関係を深める。【肢】 ・オンラインと対面とを併用しながら直接交流を計画的に進めることができた。学校間交流もオンラインを活用し交流を深めた。 | A |
| ○学年主任・担任とコーディネーター、学部主幹等が連携した支援会議を実施する。 ・必要に応じて、関係諸機関と連携した支援会議を行い、保護者のサポートができた。継続対応が十分でなかったため、必要な保護者については年度や担任が変わっても継続支援できるようにしていく。 | B |
| ○教員が学校生活支援シート作成の意義を理解し、活用に向けた保護者への情報提供を行い、活用率70%を目指す。【肢】 ・学校評価アンケートでの活用率が64%と昨年度66%より若干低下した。活用方法や有効性を保護者に伝えていく。 | B |

(8) 地域とも連携した災害対策の推進

| 取組内容 | 評価 |
|---|----|
| ○北区との災害協定を考慮した校内準備を進め、「学校災害マニュアル」を改訂する。 ・学校災害マニュアルを改訂し、宿泊防災訓練でマニュアルに沿って訓練を行った。本校の事業継続計画(BCP)を策定し、防災教育推進委員会で内容を確認した。 | A |
| ○様々な場面や方法を想定した避難訓練を実施する。宿泊防災訓練を実施し、児童・生徒が校内に留まる際に必要な物品等を整備する。 ・災害の発生時刻や被害状況等を変えて訓練を行った。天候や環境の影響で校庭への避難ができなかったため、校外への避難訓練を計画する。宿泊防災訓練では備蓄食料やランタンなど、災害用物品を実際に使用して訓練ができた。 | B |

(9) 保護者等への情報提供等の充実

| 取組内容 | 評価 |
|--|----|
| ○「学校だより」、ホームページ(ツイッター)、マチコミメールを活用した保護者等への情報提供を行う。 ・学校評価結果での保護者の満足度は【肢】93%と高いが【病】78%であった。病弱の保護者が必要とする情報は何かを把握し、発信していく。 | B |
| ○保護者学校評価や各種アンケートでの電子データでの回答・集計を一層進める。 ・学校評価アンケートは7割の保護者がオンラインで回答した。 | A |
| ○日常的な学習状況等を保護者に伝えるとともに、個人面談、退院時アンケート等を行い、保護者が必要とする情報提供を行う。【病】 ・転入時の個人面談やTeamsの機能を活用した日々の学習状況連絡によって、保護者と情報共有を進めた。学校評価でも教員の相談への対応に対する満足度が100%と高い評価を受けている。 | A |

(10) 病弱教育部門の組織強化【病】

| 取組内容 | 評価 |
|---|----|
| ○病弱教育部門の教育目標、各学部等の教育目標を策定し、教育課程等の見直しを行う。 ・各学部の各教育課程の教育目標を作成した。目標に応じた学習内容等の見直しを今後進める。 | A |
| ○こだま分教室と病院訪問学級の担当者で、課題等の共有や研究活動の連携を一層進めるための会議設定、内容の整理を行う。 ・部門の運営、部門内の分掌、教育目標プロジェクトなどの会議をオンラインで行うことで課題共有を図った。教育目標や研究活動についても合同で検討し、病弱教育の専門性を共に高めることができた。 | A |

| | |
|---|---|
| <p>○新規訪問病院での教育活動がスムーズに行えるよう、当該病院との連携や部門内での情報共有を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・病院とのカンファレンスを定期的に行うことで、児童・生徒の情報共有を図るだけでなく、学習環境の整備を進めることができた。 | A |
| <p>○こだま分教室の移転に向け、移転先での効果的な教育活動が行えるよう準備を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・隔月で病院、学校、教育庁の関係者が集まり、設計や物品整備等の課題について検討してきた。 | A |

(11) 信頼される教職員と働きがいのある組織運営の実現

| | 評価 |
|--|----|
| <p>○各分掌部内の業務内容を整理し、担当や実施スケジュールを明確化させ、効率的な業務遂行ができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各分掌で業務分担表を年度末までに整備する。来年度初めに業務分担を分掌全員で把握し、定期的な状況を確認する。進行状況を視覚化することで、業務が停滞することを防止すると同時に人材育成につなげる。 | A |
| <p>○教育活動の充実のために、教員と経営企画室職員との連携を一層強化する。行政系職員の授業見学の機会を設ける。(一人年間一回以上)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経営企画室職員全員が一回以上授業見学を実施した。児童・生徒の状況や教材の活用について理解する機会となった。 | A |
| <p>○教職員の服務事故0を目指し、日常的な注意喚起と年2回以上の研修会を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・服務事故防止研修を3回実施した。今後も継続して取り組む。 | B |
| <p>○定期的な個人情報管理ルール周知と想定される事件事例等の共有により、個人情報に関する事故の未然防止に努め、事故0を目指す。日常的なクリーンデスク(離席時の机の上はパソコンのみ)を徹底し、毎月一回の職員会議後をクリーンデスクタイムとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クリーンデスクタイムを設定することで、ほとんどの教職員が日常的にクリーンデスクを行うようになった。個人情報に関する重大事故は0件。軽微な事故があったので、継続して事故防止に取り組む。 | B |
| <p>○教育公務員として儀式的行事や研修時の身だしなみを整え、児童・生徒の模範となる挨拶を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外部講師を招聘した研修や始・終業式での規律ある服装は定着した。挨拶については引き続き意識改善を図るよう進める。 | B |
| <p>○月半ばでの時間外在勤時間の集計や毎月1回(職員会議日)の定時(17:20)退庁日、学校閉庁日の設定により、毎月の時間外在勤時間45時間・年間360時間以内の実現を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平均時間外在校時間は前年度との比較で多少減少しているが、年360時間を超える割合で勤務している者が一定数いる。 | B |
| <p>○令和5年度創立60周年に向け、PTを中心とした準備を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記念集会や記念芸術鑑賞教室の計画をし、準備している。60年の歴史をまとめた本を作るために資料を集めた。VRイベントを通してICTを全校で活用するなど、次年度計画に位置付けて進めていく。 | A |

2 まとめと今後に向けて

新型コロナウイルス感染症への対策徹底しながら、できるだけ通常に近い学習活動を行うよう学校経営を進めてきた。昨年度は実施していない水泳指導や宿泊行事を実施した。

この2年間で肢体不自由特別支援学校での水泳指導を経験していない教員が増えたこともあり安全な水泳指導のため、事前に近隣の障害者スポーツセンターで講師を招いて研修を実施した。学校間交流など相手校の状況によってまだ直接会って行うことが難しい行事も多いが、オンラインを並行することで柔軟に対応した実施が可能となった。

病弱教育部門は、少しずつ対面での授業を許可する病院が増えてきている。東大こだま分教室では、小学部の生徒は1日の2時間まで対面の授業ができ、その他はオンラインでの授業を行っている。対面指導での児童の生き生きとした表情を見た病院からもよい評価を受けている。この間に積み重ねたオンラインでの取組を継続させ、美ら海水族館のオンライン水族館見学、大道芸人を招聘した芸術鑑賞教室、子供を笑顔にするプロジェクトなども実施することができ、コロナ禍でも入院中の児童・生徒の学習を広げることができた。

教職員の専門性を高めるため、専門性の高い教諭を引き続き授業アドバイザーとして任命し、若手を中心とした授業力向上を目指して指導助言を行った。若手教員が日常的にアドバイザーに相談に行く場面も多くみられるようになった。病弱教育部門でもアドバイザーの助言から、学習指導案の中に、病気で入院する児童・生徒の視点を生徒観に加えることで、子供達の学びにくさ、配慮等をより意識した指導ができるようになった。

専門性向上のため教育部門ごとに研究を進めてきた。肢体不自由教育部門の自立活動を主とする課程では「生活年齢に応じた国語・数学(算数)の題材配置と指導事例の蓄積」、知的障害を併せ有する児童・生徒の教育課程及び準ずる教育課程では、タブレット端末を有効活用する児童・生徒に応じた設定の工夫」をテーマとした。また病弱教育部門では「子どもの長所を伸ばし、生き生きとした学びを引き出す病弱教育の在り方」について都の「ふりカエルシート」を基に開発した「楽しく学習するためのアンケート」を活用して進めた。

新たな取組として、小・中学部児童・生徒への一人1台タブレット端末の活用を進めている。教職員のICT能力に応じた研修会を実施しミニマムスキルの定着を図ったが、タブレット端末の有効活用には課題は多い。また、今年度の新1年生には対象者がいなかったが、医療的ケアによる保護者の付き添い期間の短縮化についても計画的に進めている。

児童・生徒の安全面では、肢体不自由教育部門で令和2年度に重大事故を起こしたことを過去のものとしないうよう、本校で起きた事故を振り返る研修等を通して注意喚起した。今年度の事故件数は8件で昨年に比べ減少はしているが、継続した取組が必要である。また、個人情報を含む文書に関わる事故も2件と減少している。引き続き緊張感をもって、事故防止に向けた取組を進めていく。

子供たちの安全を守り、効果的な学習を進めるため、教員、学校介護職員、病弱教育支援員、看護師、経営企画室、外部専門家等の連携強化、情報共有を推進した。肢体不自由教育部門では経営企画室職員の授業参観を行うことで、教材や学習環境整備について課題共有した。病弱教育部門は、運営に関わる合同の担当者会議や研究活動をオンラインで定期的に行った。こだま分教室と病院訪問部での課題共有や専門性の向上を図ることができた。

次年度も引き続きコロナ禍での教育活動を進めていくこととなる。消毒や換気等の感染症対策を徹底しながら日常の授業を充実させ、行事や部活動についても今年度の実績を踏まえ計画的に実施していく。

子供たち一人一人がもっている力を最大限発揮できるよう、教職員の専門性を高め、安全で学びやすい学習環境を整備していく。